三題小噺集～なんでもアリな物語達～

兄琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三題小噺集～なんでもアリな物語達～

【Ｎコード】
Ｎ７２１８Ｊ

【作者名】
兄琉

【あらすじ】
３つのお題を元に短編を書いていこう！決めてもらったお題を使って短編を書き連ねる個人企画です。リクエストも随時受け付けていますのでお気軽にどうぞ！一話５，０００字以内で頑張っていきますのでよろしくお願いします。

第一回　『酒』『携帯』『火』（前書き）

初めましての方は初めまして、そうではない方はこんばんわお久しぶりです、兄琉です。

今回の第一回小噺は『酒』『携帯』『火』。

ではどうぞ！

第一回　『酒』『携帯』『火』

三題小噺第二回『Ａ　ｃａｔ　ｈａｓ　ｎｉｎｅ　ｌｉｖｅｓ．
―執念は時に男を変貌させる―』

ねぇ、聞いた事ある？あの都市伝説。そう、ソレソレ。

お前困ってるのか？ならアレ探せがいいんじゃないか？噂だけどな。

クソ…どうにもならねぇ…アレするか。本当にあんのかよ…頼むぜ。

なんでもね、ある【携帯】の電話番号に電話すると…何でも夢がかなうんだってさ。

町には、色々な顔がある。
昼間に見せる明るい顔。
夜に見せる静かな微笑み。
朝に見せる柔らかな顔。
その中でも、道一本外れるだけでも町の表情は一転する。

男は路地裏の影にひっそりとうずくまっている。
真剣そのものの表情、無線機を握る手にはびっしょりと汗をかい

ていた。
恐怖に震えるその指で、ゆっくりと…無線機のスイッチを入れる。
「こちら、ドラゴン…こちらドラゴン、スカーレット応答せよ」
『こちらスカーレット…何か行動に支障が出ましたか？どうぞ』
「支障はないが、奴はこの近辺にいるとみて間違いないな？」
『えぇ間違いないわ、彼の発信機はドラゴンの半径２０メートル以内にいると出ています』
「クソっ…どうなっていやがる！」

ドラゴンはあくまでも声が漏れないように小さく悪態をついた。
本当であればこのままゴミ箱の一つでも蹴倒してやりたいが、そうなると感づかれる可能性が高い。
親指の爪を口に持っていき、ガリッと強めに噛む。彼のイラついた時特有の行動の一つだ。

ザザッ！

「！！」

ドラゴンの後ろで何かが横切った！
すぐさま後ろを振り向くが、その姿はすでにない。
彼をあざ笑うかのように倒れた缶が転がっていた。

「スカーレット、いやがった…一旦通信を切るぞ」

ドラゴンはスカーレットの返事を待たずに無線機の電源を切る。
無線のノイズが向こうに勘付かれたら元も子もない。
ターゲットが通り過ぎたと思われる曲がり角に、ぴたりと張り付いた。

「（本当に…この向こうに、いるのか…？）」

ドラゴンは目を細めて臨戦態勢に入る。

彼の手に握られているのは、今回の為にスカーレットに頼んで手に入れた得物。持ち手のついた黒光りする筒状の得物はターゲットに当てる事さえできれば、相手は無事では済まないだろう。

人目に付けばドラゴンは無事ではいられない。御上の元に連れて行かれることになるのは確実だ…。

それほどまでに本気だった。

ドラゴンは緊張のあまり、自分の喉を通る唾の音がターゲットに聞かれたのではと疑心暗鬼に陥る。

「奴さえ、奴さえ捕える事が出来れば…俺たちは莫大な金を手に入れれるんだっ！」

ぎゅっと音が出るほど得物を握りしめ、ドラゴンは逸る心臓を抑えつつ角からゆっくりと覗き込んだ。

「…っ！」

目を見開いたまま、固まる。

ドラゴンは自分の息が上がるのを感じた。遂に、遂にこの時が来たのだ。

一旦角の影へと身をひそめ、通信機の電源を入れる。

「スカーレット、奴（ターゲット）を…確認したっ！」

あくまでも小声で叫ぶ。

だが、自分の頬の肉がつりあがっていくのを抑える事は出来なかった。

『ドラゴン…遂にこの時が、来ましたね』

スカーレットの声も普段よりは嬉しそうに聞こえた。
普段から冷静で無表情な彼女にしてみればかなり嬉しい様だ。

「あぁ、しかも奴は【酒】をやっているのかは知らんが、確実に酔ってやがるっ」
『ふふ、やはり彼も疲れているようですね。我々の放った刺客に易々と引っかかってくれるとは』
「しかも現場付近に戻って来るとはな…、犯人は犯行後現場に戻るってのはあながち間違いじゃなさそうだな」
『私の分析通りだったでしょう？ドラゴン、早くケリをつけましょう。奴は狡猾です、何をするかわかりません』
「あぁ、分かったぜスカーレット」

そこで一旦ドラゴンは通信を切る。
先程の恐怖に満ちた指先とは違う、希望に満ちた震えだった。

「テメェも年貢の納め時だ…。何っ！」

思わず、ドラゴンは自分の得物を取り落としそうになる。
だがドラゴンもプロ、物音をたてる事は決してしない。
ドラゴンの動揺にスカーレットも気がついたのか、緊張が走る。

『ドラゴン、どうしましたか』
「奴めっ…！火器を持ってやがるっ！」

通信機越しに、空気が張り詰めるのがドラゴンには分かった。
震える声でスカーレットからの通信が入る。

『なんですって…こちらには気が付いているのですか？』
「いや、わからねぇ…だが奴は俺達と違って遊んでやがる。俺たちよりも火器の調子を見るのに余念がなさそうだぜ」
『ではその隙をついて突撃しては？ドラゴンならば可能でしょう』

確かに、直接対峙して一対一の決闘ならばドラゴンに分があっただろう、しかし。

「駄目だ、もし奴の武装解除をする前に周りに【火】を放たれたら逃げられちまう。生憎周りには燃えるゴミがいっぱいだ…。流石にボヤを放置して追う訳にもいかねぇからな」
『くっ…やはり高額の懸賞金がかかっているだけはありますね、狡猾で残忍なっ』
「いや…奴は、純粋なだけさ…全てに関してな」
『ドラゴン…』

スカーレットの言い聞かせる様な声に軽くため息を一つ。
一度だけ、空を見上げた。

「分かってるよ、奴のした事は大罪だ。逃さねぇよ」
『…ご武運を』

今度こそ本当に、通信機電源が落ちる。
次にドラゴンがスカーレットの声を聞くのは、全てが終わった後でだろう。

「奴が得物から注意を逸らした時が、勝負だ…」

ドラゴンはいつの間にか背中にびっしょりと汗をかいている事に気がついた。
今まで気がつかなかったのは、それだけ真剣だったと言う事だろう。

幸いにして今の季節は春。気温の変化でドラゴンの体力が激しく奪われると言う事はない。
ドラゴンはひたすらに待った。たった一瞬のチャンスをものにする為に。
そして五分後、ドラゴンにしてみれば五時間ほどの感覚だった時間が経ち、遂にその時が訪れる。

「来た…今だっ！」

一瞬後ろに下がって、体を屈めてからスピードに乗った状態で一気に影から飛び出す。
ターゲットは体を一瞬固まらせるが、その反応力は流石と言うべきか…即座に我に戻って火器を捨てて逆方向へと駆け出そうとした。

「逃がすかっ！」

それでも僅かにスピードに乗っていたドラゴンの速度には負け、ドラゴンの得物が唸りを上げた！

自分の頭上を見上げると、そこにはビルの壁で切り取られた綺麗な澄み渡る様な青空が覗いている。
ドラゴンは、顔をくしゃりと歪めると通信機の電源を入れた。

『ドラゴン、お疲れ様です』
「あぁ、スカーレットもな…」

ドラゴンは、今はただ…勝利の余韻に浸る。

「ありがとうザマス！このお礼は何と言っていいのやら」
「いやぁ、これが仕事ですから。しかし期日ギリギリになってしまい申し訳ありません」
「ワタクシ、ミーちゃんがいなくなった時どうしようかと思ったザマス。一度も家から出た事ないものザマスから…しかも三毛猫のオス、ザマス…。あぁ、よかったわねぇミーちゃん！」
「にゃぁ～」

明らかに太り気味なザマス婦人に抱えられた猫が一鳴きする。

「でも、健康診断をした時何故かマタタビを吸った跡が見つかったようですの…貴方達じゃないザマス？」
「…っ！いえいえ、めっそうもない！我々が見つける前にどこかで吸ったのでは？では、私はこれにて。これからも竜胆(りんどう)探偵事務所をよろしくお願いします」

ありがとうザマス～と甲高い声と猫の間の抜けた鳴き声に見送られ、男は豪邸を後にした。

「…竜胆(りんどう)さんお疲れ様です。」
「あぁ…紅井(あかい)か、お疲れさん」

途中で男より少し背の低い女性が路地から姿を現す。
男が屋敷から出てくるのを待っていたようだ。

「ところで…あの猫の持っていた火器って何だったんですか？」
「…マッチだよ。間違えて燃えたら危ないだろうが」
「…疲れましたね」
「あのクソ猫に特上寿司全部食われたからな…当分質素な生活だぞ」
「ついでに竜胆さんの給料からあの捕獲網の代金引いておきますね、一万円」
「はぁ！？高っ！経費で落とせよ！」
「竜胆さんが無駄に黒いのがいいと言うからでしょう。スプレー買って塗装したんですから…網３，０００円にスプレー１，０００円、私に対する技術料が６，０００円です。後、経費で落ちません」

ぐぁー、殺生な！と叫ぶ竜胆探偵とその助手赤井は自分達の住処へと帰っていったのだった。

『【私立竜胆探偵事務所】
犬の散歩から浮気調査までなんでもござれ！
竜胆が誠心誠意をもって解決いたします！』

二人は看板を一回だけ眺め、事務所へと入っていく。

大きな事件もない為金もなく、電話を引くことすらできない探偵事務所。

でも確かにそれは存在している…。

ただ…誰も知らないだけなのだった。

第一回　『酒』『携帯』『火』（後書き）

『酒』『携帯』『火』いかがだったでしょうか。

一気に書きあがったので何とも言えないこの気持ち…。
アホっぽい話でした。

サブタイトルにある『Ａ　ｃａｔ　ｈａｓ　ｎｉｎｅ　ｌｉｖｅｓ．』は『猫に九生あり』ということわざで、猫は執念深くなかなか死なない、何度でも生き返る。と言う意味らしいです。
猫を使いたかった、ただそれだけです。少しは関連する言葉にしたつもりですけど。

次回は『ＬＯＶＥ』『嫉妬』『師弟』でお送りします。
今回と同じ人に聞いたのにこの差はなんだろう。

では評価感想お待ちしております！

第二回　『ＬＯＶＥ』『嫉妬』『師弟』（前書き）

第二回の小噺は『ＬＯＶＥ』『嫉妬』『師弟』。

ではどうぞ！

第二回　『ＬＯＶＥ』『嫉妬』『師弟』

三題小噺第二回『師匠の気持ち、弟子の願い』

「やぁ、修司。頑張ってるわね」
「…師匠がやれと言ったんでしょう？」

うだる様な暑さで庭の石は焼け、木に止まった蝉は自らが焼かれているかのような叫び声を上げる。
竹ぼうきの動きを止めた青年は額を流れる汗を服の袖で拭った。
部屋の奥から姿を現した女性は太陽のような笑顔を咲かせる。豪快だが美しい顔つきの女性の笑顔は青年の頬を赤く染めるには十分な効力を持っていた。

「ほら麦茶、飲むでしょう？」
「ありがとうございます…」

青年は竹ぼうきを柱に立てかけ、女性の隣へと腰を下ろす。
縁側に並んだ姿は【師弟】のものではなく姉弟のそれだった。青年にとって姉弟関係は好ましくない物ではあったが…。

頬に押し付けられた麦茶を青年はその冷たさに驚きつつも受け取り口をつける。
二人の間には会話こそないが、至福のひと時だった。
だが、青年の心を占めるのは情愛の念だけではない。

「師匠…僕は、一体いつになったら一人前になれるのでしょうか」

「……知らないねぇ」

カラン、と氷が音を立てて崩れる程間をおいて女性の口から放たれたのは無責任な一言。

目の前にいる女性の家の門を叩いたのは数年前。数日間の押し問答を経て弟子入りしたのは、昔は陶芸界の神童等と呼ばれていた青年だった。

師匠が卒業と言うまでは独り立ちしない、それが最初に交わした約束の一つ。

「僕はっ…！」

やり場をなくした怒りをガラスのグラスを力強く握りしめる事で収め、立ち上がる。

先程の熱とはまた違った熱が青年を支配する。青年はそのまま部屋の奥へと立ち去って行った。

残された女性の頬を夏風がなぜる。

師匠と呼ばれた女性はグラスを一度揺らすと、その先に見える歪んだ景色を眺めて溜息を吐いた。

縁側の熱は青年が持ち去ったかのように、冷めてしまっていた。

「ままならない、ものねぇ…」

この地域の夏の晩は昼とは対照的に涼しい風が流れ込むもので、青年の部屋は一つある窓を開け放っていた。

昼の蝉とはまた違った鈴虫の合唱も少しばかり聞こえてきており、

季節の変わり目を感じる。
机の上に置かれたラジオは懐かしの曲をただひたすら流していた。
「僕は…どうしたいのだろうか…」
自問自答の内容はここ数日ずっと同じだった。

一つは、青年の仕事である陶芸について。
青年は過去に神童、とまで呼ばれていた事もある。その技術力は年齢を遥かに超えたものであり、その事は青年自身、自覚していた。
だが、逆にそれだけだった。悪く言えば個性の無い青年の作品は人々の記憶に残らず、神童はいつしか人の記憶からも消えていった。
その状況を打破する為の、自由な作風で知られる今の師匠への弟子入り。
結果、青年は大きく成長を遂げた。自分で思っているだけでなく、師匠の客に褒められた事も多々ある。

「くそっ、僕はいつまでここにいるんだ…」

青年と師匠の差はもうあまりない。こう青年は考えていた。
それなのに師匠は未だに卒業と言ってくれない。
『実は師匠は僕の技量に【嫉妬】して卒業させないんじゃないか？』
あり得ないと分かっているのに、そんなことまで近頃では考えるようになっていた。

そんな自分に苛立ち、青年は窓を乱暴に閉める。そうすれば熱くなるのは分かっているのに、今は夜の音すら青年の心をかき乱す。
そのままの手でラジオも電源を落とそうかとした時、青年の耳に一つの音楽が流れてきた。

『【LOVE】，love me do.
You know I love you，（君が好きさ）
I'll always be true，（愛してるよ）
So please，love me do.（だから君にも）
Whoa，love me do.（愛して欲しい…）』

「Love me（あいして）…do（ほしい）、か…」

青年の自問自答のもう一つの理由、それが自らの師匠に対する情愛の念。

師弟として暮らす内に芽生えたほのかな恋心。それは日に日に青年の心の中で大きく膨らんでいき、ついには無視できない大きさにまでなった。

一時は全てを告白してしまおうかとも考えた。師弟関係での恋愛等許されるはずもない。良くても破門程度は言い渡されるだろう。

そうすれば全てを終わらせる事が出来る…そうすれば、自分の醜い心を見せずに済む。

そうすれば…諦める事が出来るのに…。

「…寝るか」

青年は大きなため息を一つ、布団の中へと潜り込んでいった。

数日後、先日の暑さとは打って変わって涼しい毎日が続いていた。

蝉よりも鈴虫が印象深い時期になり、二人の師弟関係にも幾らかの変化が訪れていた。

「今日の掃除も、これで終わり…か」
「…修司、ここにいたのね」
「掃除なら今終わりましたよ」

青年は師匠を一瞥すると、落ち葉を入れる袋を取りに倉庫へと行こうとした。
その姿は師匠から逃げる様で、一層師匠の感情を高ぶらせる。
「何故、あたしを避ける…」

二人の間に再び横たわる沈黙。
だが、この沈黙は以前のように青年の心を満たす事はせず、ただただ心苦しくするのみだった。
「別に…避けてなどいませんよ」

いつになく、真剣な表情で語りかける師匠に対し、決して目を合わせずに無愛想に返答する青年。
その様子を見て何かがブチンと千切れる音が確かにした。
「だったら何故、同じ家に住んでいるのに全く顔を合わせない日がある？何故、決して目を合わさないんだ！？あァ！？」

激しい音を立てて庭に降り立ったと思ったら、青年の胸ぐらに掴みかかった。
感情をそのままぶつけてくる師匠に対して青年も次第に頭に血が上る。
「五月蠅い！アンタに僕の気持ちが分かるか！？認められたいのに

認められず、愛しているのに愛する事も許されず！アンタは恐れているんだろう、僕にその地位を脅かされるのを！」

集めた木の葉が、ザザザァッと秋風に巻きあげられていった。

青年は荒く息を吐き、自分の胸を掴んでいた手がいつの間にかなくなっている事に気づく。

そして自分の放った言葉の重大性に動揺してしまった。

「あ…師匠…。僕は……え？」

青年は手を離した師匠を見上げ、更に動揺した。

師匠は、泣いていた。

自分の肩を抱いて、体を震わせながら…見えない何かに脅える少女の様であった。

「あたしは…あたしは…」

青年の心が早鐘の様に音を刻む。

自分の最も愛する女を泣かせてしまった事実。悔やむ気持ち…だがそれ以上に、綺麗だ…そう思ってしまった。

思わず青年は師匠を放すまいと、自分の胸へとかき寄せた。

師匠もまた、嫌でないのか考えられないのかは分からないが…黙って抱かれていた。

師匠の体の震えが止まったのは、それから数時間が経っての事だ

った。

「ごめん…修司…」

「いえ…こちらこそすみませんでした」

決して二人は目を合わせようとしない、いや合わせられない。

「さっきの言葉は…本当、なの？」

「えぇ…」

「そう」

ゆっくりと、師匠の体が青年から離れて行った。

「修司、貴方を…破門します。明日までに荷物をまとめて出て行くように」

「えっ！いや…分かりました。ではこれで…」

諦めの気持ちが修司を支配した。師匠を侮辱したに等しい一言にこうなるのも必然と修司は考える。

決して目を合わせないように立ち上がり、自室の方へと足を向ける。

「…たくなかった…」

「え…」

秋風に乗って微かに聞こえてきた師匠の一言。

初めて聞く弱弱しい声は修司の心に深く届く。

次の日、弟子は師匠のもとを去った、師匠の最後の言葉を胸に巣立っていく。

『修行し、認められてから戻ってこい…その時は、あたしからも伝えたい事がある』
その顔に失意はなく、希望と情熱に満ちた自信の表情だった。

ー数年後ー

『第〇〇回長二賞前衛部門、入賞…加古川修司』

ざわっ、と会場が湧きあがるのを修司は感じた。過去に神童と呼ばれ、消えていった青年が突然流星のように現れたという驚き、入賞確実と言われていた大型新人を抑えたと言う事による驚き、様々な後期の視線が修司を包み込む。
修司は大声で叫びたくなるのを必死で押さえこみ、自らの栄光を讃える壇上へとあがっていった。

「これでやっと…会いに行ける」

閉会後、修司は会場から飛び出していく。周囲の呼びとめる声はもう聞こえていなかった。
早く、早く会いたい…それだけを願い、外へとつながるドアを勢いよく開いた。

「修司、大きくなったね」
「し、師匠！なんでここに！？」
「知り合いから修司が賞に応募したと連絡があってね。まさか部門賞を取るとは思わなかったけど…キャッ！」

修司は思わず師匠に抱きつく。まさか師匠から会いに来てくれるとは思ってもみなかった。
子どもの様に抱きついてきた修司を師匠は優しく包み込む。

「ごめんね…あの時破門なんて言って」
「いえ、師匠のあの言葉があったからここまでこれたんです」
「う、覚えていたのね…」
「そりゃ…あれ、何て言われたのか忘れたなぁ。言って下さいよ、俺に向かって」
「態度もでかくなったものね…」

修司の無言の笑みの間に、師匠の顔は紅潮していく。

「貴方と離れたくなかったから…貴方がどこか行ってしまう気がして、言えなかった…、これでいいでしょ！」
「えぇ、ではこれからは一緒にいても…俺は、貴女を愛してもいいですか？」
「もちろん、離れてた数年分もまとめて…待ってたんだからね？」

数年越しに見た師匠の笑顔は、やはり太陽の様に綺麗だった。

第二回　『ＬＯＶＥ』『嫉妬』『師弟』（後書き）

『ＬＯＶＥ』『嫉妬』『師弟』、いかがだったでしょうか。

恋愛モノは苦手だ。これが私の正直な感想です…。

まぁだからと言って何が得意なんだと聞かれると困りますけど。

次回は『神』『宇宙』『原始』でお送りします。

では評価感想お待ちしております！

第三回　『神』『宇宙』『原始』（前書き）

第三回は『神』『宇宙』『原始』です。

どうぞー

第三回　『神』『宇宙』『原始』

第三回三題小噺『白き蓮と、黒き千日紅』

「うぁあああああああああああああ！」

一瞬の、出来事。

オレは山の中を逃走中だった。

ある有名陶芸家の家が近くにあると言うこの山道は、交通の要所として大きな役割を持つ。

後ろを確認しながら死に物狂いで逃げていた。追手は遥か後ろ、このままいけば逃げのびる事も可能だった。

逃げ伸びれば…アイツに会える…。

それなのに…。

急に足の踏み場がなくなったと思ったら、オレは崖の上から川へとダイブしたのだった。

「…イテテ、ここぁ…どこだ？」

オレは軽く痛む腰を抑えて立ち上がった。

周りに見えるものは何もな…いや、遠くに何か見える。

この白い世界を横にぶちぬく巨大な壁の様なもの。だがそれもまた白かった。

「取りあえず行ってみるか」

数十分ほど真っ直ぐ歩いて行った先にあったのは長蛇の列。人や動物、木まで歩いてやがる。
全員ボーっとしてまるで操られてるみてぇだ。

「貴方が、楢崎零次(ナラサキレイジ)ですね。こちらへ」
「ァん？何でオレがテメェの言う事聞かないといけねぇんだよ」
「決まりですので」

そう目の前の男が言って、目があった瞬間…オレはコイツの言う事を聞かなきゃいけねぇ気になってしまった。
オレは色んなものが並ぶ列の横を連れられて、格別に大きな門のところまで来ていた。
門が重厚な音を立てて、ゆっくりと開く。そこはこれまでの真っ白な宮殿とは違って赤と金を基調にした中国風の部屋だった。

「お前が、楢崎零次か…」

声に思わず気を取り戻し声のする方を見るが、そこには巨大な垂れ幕が下がっているだけだ。
隣にいた男はいつの間にか消えてやがる。

「上だ、上を見よ」
「ハァ？…なっ！」

そこにいた、いや…あったと言いたくなる程に人間離れした巨大な顔。
ヒゲをたくわえ大きな帽子をかぶったその姿はおとぎ話に出てくるようなモノだった。

「閻魔…大王？」
「いかにも。お前がここに呼ばれた理由は儂が直々に罪を下す為だ、光栄に思え」

閻魔は重々しい息を吐くとぶっとい、それこそ一本でビルを倒せる様な指を上にクイッとあげた。
するとオレの体は妙な浮遊感に襲われ、気がつけば閻魔の近くに来ていた。

「楢崎零次、罪状…窃盗、詐欺、怠惰…読みあげるのも面倒だな、数え切れぬ程の悪行によりお前は処罰される事になる」
「ハァ…！？待てよ、じゃあ何か？オレは問答無用で地獄行きってヤツか！？」
「本来ならば地獄も地獄、最下層の無間地獄なのだが…何分お前の悪性が強すぎて地獄ですら混乱を招きかねん。よってだ、お前には楽園にいってもらう」
「ふざけ…え、楽園？」
「そうだ、楽園だ。そこにいる奴がなかなかに未熟な奴でな…修行を兼ねてお前を送る事にした」
「て事は…や、やった！ついてるぜ！」

つまりオレは罪深すぎて罪を消されるって事か！
ラッキーにも程があるってもんだ。

「フゥ…、では早速行くぞ」
「あぁ、頼んだ！」

閻魔がオレの方へ巨大な印鑑を振り降ろすと同時に、オレの意識は再び消えた。

「ブラフマ様、本当によろしかったのですか…？」
「あの娘も未熟とはいえ【神】だ、問題はなかろう。あの男が知ってしまわなければ…だがな」

零次を連れてきた男が部屋に入った時既におどろおどろしい部屋の面影はなく、いつも通りの真っ白な部屋に同じくらいの背丈の男が一人立っているだけだった。

「ったく、痛ェ…ここぁどこだ？」
「…えっ？」

不意に背後から聞こえた声に、オレは思わず振り向きざまに拳を振るっていた。
確かに感じる肉の感触にドゴォ！と爆砕音が鳴り響く。

「…は？」

一般人であればあり得ないその結果にオレは茫然として、慌てて粉砕した樹の根元へと駆け寄った。
そこにいたのは一人の少女、可愛らしい顔なんだろうが如何せん気絶しているせいで口がだらしなく開いていて台無しだ。

「おい、起きろ。おーい」
「……はっ！はひっ！」

本当に大丈夫か…？と思ったが目立った外傷はない。目を回しているようだが問題はないようだ。
次第に混濁した意識が戻ってきたのかオレと目が合う。

「ひゃぁっ…！」

ズザザー、とすごい勢いで後ずさりこちらをじぃっと上目づかいで見つめてくる少女。

長くきれいに整えられた艶やかな黒髪はどこか世間知らずな印象だ。

オレが一歩近づくと何かに気づいたように目を見開いて、こちらへと駆け寄って来る。

「貴方は…何を忘れてきたのですか？」

微笑む少女の、始めの一言は意味がわからなかった。

「おーい、薪ここに置いておくぞ！」

「あ、はーい。ありがとうございますレイジさん」

オレは背中に背負っていた薪を風呂の隣の薪置き場に丁寧に置いた。

ここでの生活ももう何年経っただろうか。

生活にも慣れ、何とか楽しくやっている。一つの不安要素を除けば、だが。

アイツの笑顔を見るとオレまで笑ってしまう。最近じゃあオレも丸くなったもんだなんて考える始末だ。

アイツの一挙手一投足を追ってしまう。言っておくが変態じゃないぞ。

「えへへ、レイジさんっ！」
「おいおい、そのタックル地味に痛いんだからな」
「これはわたしの『せんばいとっきょ』なんです！」
「妙な言葉だけ覚えやがって…」

分かった事と言えばここがどんな場所か、アイツが神だったと言う事くらい。
神とは言っても生まれてここから出た事ないと言う話だから、無知と言っていいほどだったが。
楽園、いやこの箱庭にいる人間はオレとアイツの二人だけらしい。だが生活に困ることはない。様々な実のなる樹、畑…小動物だっていくつか暮らしている。
始めは驚いた。神様なんて言う位だ、神通力でも何でも使って楽な生活をしているのかと思っていた。
だが、ここでは家や服こそ普通にあるものの、全く【原始】的な生活を送っている。
最初こそついていけなかったものの、最近やっとあの異常な体力についていけるようになった。

「なぁ、今日森の向こうまで行ってきたんだが…ありゃなんだ？」
「あ～行っちゃったんですか…レイジさん」

少女は少し悲しそうな顔になる。困ったように笑っているが、何か知られたくなかったのだろうか。
つられて俺もすまなそうな顔になる。

「ここはですね、楽園、箱庭…良い様に名前は付けられていますけど、分かりやすく言えば監獄なんですよ、わたしを置いておくための」
少女はゆっくりと近くの木の根元に腰をおろして独白を続ける。

「【宇宙】の果てに、絶対に逃げだせないように造られてるいるんです。何故ならわたしが…」

ドクン、激しく心臓が胸を叩く。その先を聞いてはいけないとでも言うように、オレの意識は吹き飛ばされた。

「レイジさん！レイジさん！」
「あ、アァ…大丈夫だ心配するな…」

気を失っていたのは一瞬の事だったらしい。膝の上に寝かされていた。
オレの懸念の一つがこの発作、魂が崩れかけているんだろう。これまでは何とか隠してきたんだが。
もっと、コイツの事知りたかったんだがな…。そいつも無理なようだ。

「大丈夫な訳ないです！レイジさんが死んじゃったかと思って…えぐっ」
「ケッ…泣いてんじゃねぇ。」

相変わらず、ガキだ。箱入りっぽさはオレが何を教えても変わっちゃいねぇ。
だが嫌という考えよりもどうしたら泣きやむだろうと考えているオレがいた。
…何も思いつかねぇや、つくづく自分が嫌になる。

「悪ぃが…先に逝かせてもらうぜ」
「魂が…溶け始めてます…。…いやだっ！嫌だ、消えないでレイジさん！わたしの力でっ！」

何とか繋ぎとめようと必死に力を注ぐが、無理な話だった。

「諦めな、自分の死期位分かってる…理由はしらねぇがな。」

オレは頭に手を置きゆっくりと撫でてやる。今のオレには軽口を叩く位しかできない。

「ま、オマエも厄介ものがいなくなってよかったじゃねぇか」

「よくないです！レイジさんがいなくなったら…わたしにもっと力があれば…未熟じゃなかったら…」

「馬鹿野郎、オマエは変わったよ。それに、オマエが最初から完璧だったら…オレはオマエに会えなかったじゃねぇか…」

「レイジさん…」

「だから、泣くな…楽しかったんだから、よ」

必死に笑顔を作るが、作れていただろうか。頬を伝うのは、アイツの涙だけなのだろうか。

守りたかった…ただ、コイツと一緒にいたかった…。

「おい……あ」

そこでオレはふと、気付いてしまった。

「ははっ、傑作だ。こりゃぁひでぇ」

「レイジさん…？」

「一緒にいたい、守りたかった…くだらねぇ…。オレはオマエの名前すら知らねぇじゃねぇか」

守りたい奴の名前すら知らない、こんな騎士がいるだろうか。

「やっと、自分の気持ちに気付いたのにヨォ…。もっと早く、気付いて…認めてりゃあ…くだらネェ意地張りやがって」

「レイジさん！わたしは、貴方に助けてもらいました…悠久の年を過ごすわたしに喜びを、過ちを…色んなものを教えてくれました。

だから決して…っ！」

もう、お互いの顔も滲んで見えないだろう。

「最後に…オマエの名前、教えてくれよ。冥土の土産って奴にか？ははっ」

「わたしには…まだ名前がありません。レイジさんが、付けてくれますか？」

「へへっ、オレが名付け親になるってか…悪くネェ」

オレは少しだけ悩んで、

「『白蓮（ハクレン）』…すまないな、こんなのしか思いつかん」

「ありがとうございます…白蓮、わたしの名前は白蓮…」

「あぁ、じゃあな、レン。ちったぁ、神らしく…頑張れよ。今回は…忘れ物せずに済みそうだ…」

口をゆっくりと大きく開いて、次に横に開いて…。

五十音の最初の二文字を形作ったところで、レイジを抱えていたレンの腕から砂の様な塊が滑り落ちた。

それはレイジ、と呼ばれていた…ものだった。

「…間に合わなかったか」

「お父様…」

レンの後ろに現れたのはレイジをここに送った張本人だった。

男は苦虫を噛み潰した様な表情でそこに立っていた。

「楢崎零次は、逝ってしまったか」

レンは答えない。だがこの状況を見れば答えは自ずと見えてきた。

恐らく知り過ぎてしまったのだろう、神について。過ぎた知識は

身を焦がす。
微かに聞こえた最後のやり取り…神に名前を付けた事が大きく響いたのだ。
「お父様…わたし…、妾に今一度神としての教育をしてはくれないだろうか」
「…いいだろう、白蓮よ。最高神の我が子よ」

その昔、優しい神がいた。
その神は優しい故に、神の資格を失った。
優しすぎたのだ。
父親の最高神は娘を箱庭へと追いやった。

そしてある時一人の男が箱庭を訪れた。
男は罪人だった。その全てが貧しき者の為とはいえ、あまりに罪を重ねすぎたのだ。
男は優しき神と出会い、恋に落ちた。
だがお互いに気持ちに気づけぬまま、男は死を迎える。
男が神に送った名前は『白蓮』。
蓮の花言葉は、『神聖』『清らかな心』『離れゆく、愛』。
最高神『白蓮』は、こうして生まれた。

聖書第二節『白蓮の花』より

第三回　『神』『宇宙』『原始』（後書き）

はい、この短い字数で感動なんて薄まり過ぎて微妙だと痛感した、兄琉です。
考えているうちに設定がポコポコ出てきてもったいなかった作品でもあります。

長編で…3話位かけてかきたかった…。
また機会があれば3～5話の連載に書きなおすかもです。

次は『黒』『形而上』『逃避』。

では評価感想お待ちしております。

【追記】4／24
今回上げた3つのキーワード『黒』『形而上』『逃避』ですが、私自身が『形而上』と言うものを結局上手く理解できず、前回と大分間も開いたと言う事もあり次回はテーマを変更してお送りします。
次回は『屋上』『涙』『垂れ幕』です。

一度掲げたモノを下げるのは大変申し訳ないです……（涙）
なので、ぜひいつか！形而上をそこはかとなく理解したその時に、『黒』『形而上』『逃避』を書きます。
待っている人がいるのかは知らないですけど、待っていてください！

第四回　『屋上』『涙』『垂れ幕』（前書き）

どうも、すっっっっごくお久しぶりです、兄琉です。
もう忘れられてる気がヒシヒシと伝わって来るこの作品ですが読んでいただければ幸いです。

では第四回『屋上』『涙』『垂れ幕』どうぞ！

第四回　『屋上』『涙』『垂れ幕』

三題小噺第四回『救えるならば救いたい』

僕が【屋上】に行ったのは、何かの偶然だったと思う。
たまたま、時間があいていて、春の風を体に浴びたくて、屋上の扉を開いたんだ。

普段誰も立ち入らない屋上なだけに、随分と年季の入った錆の音が屋内に響いた。
一瞬の目眩と同時に暖かい風が僕の頬を撫でる。
目に入ったのは、青い空、白い雲、古びたコンクリートの床……
そして、柵の向こうに一人たたずむ女の子の姿だった。
僕と同じ学校の制服を着ていて、長髪を風になびかせるその姿は、僕の心を強く打った。
扉の音に気がついた女の子がゆっくりとこちらを振り向いて……、

「……っ！」

驚いた表情を見せたが、再び地面の方へと視線を移す。
一瞬見えたその顔には一筋の【涙】が流れていて……女の子に足元に置かれた紙を見て僕は先程とは別の意味で心拍が上がるのを感じた。
同時に、口から言葉が飛び出す。

「（自殺なんて）止めるんだ！何があったのかは知らないけれど、君がそんなことする必要はない！！」

女の子は再び驚いた表情でこちらを見たが、こちらを険しい表情で睨みつけてくる。

「私は……私がしなきゃいけないの、言われた事だから」

「言われたからって何でもやるのか！？そんなことは間違っている！！」

「……じゃあなたが変わりにやってくれるって言うの？」

「そ、それは……」「貴方も怖いんじゃない、じゃあ余計な口出ししないでよ！私の決心が鈍るのよ！」

「……くっ」

どうやら女の子は心変わりするつもりはない様だ。ならば力づくで助けるしか……。

そう思った時には、僕は既に走り始めていた。

柵までの距離は１０メートルほどっ！行ける！

だが、僕が突然走りだした事に驚いた女の子は、一歩、二歩と震える足で後ずさり遂には屋上の淵に辿り着いてしまう。

宙へと踏み出す最後の一歩で足元に置いてあった紙を蹴飛ばし、紙だけが宙へと舞っていった。

「危ない！」

柵越しに突き出した僕の手は間一髪女の子の手を掴んだ。

勢いそのままに引き寄せ、女の子を抱きしめる。

「だ、大丈夫だったかい？」

女の子は肩を震わせて、下を向いたままだった。

数瞬後、勢いよくこちらを見上げると、それはそれは綺麗なアッパーを打ち上げてくれた。

「ちょっと！何してくれるのよ！」
「え？」
「アレ！落ちて行った【垂れ幕】！」
「アレ……？遺書じゃないのか？」
「あんなデカい巻物の遺書なんてある訳ないでしょ！先生に頼まれてたのに……。どうしてくれるのよ！」
「えーっと、じゃあなんで泣いて……」
「……高所恐怖症なのよ（ボソッ）」
「……」
「……」

「じゃあ垂れ幕取りに行くか、僕も手伝うからさ……」
「……そうね」

数分後、屋上には仲よく垂れ幕を下げる、二人の姿があったとか。

第四回　『屋上』『涙』『垂れ幕』（後書き）

第四回『屋上』『涙』『垂れ幕』、いかがだったでしょうか。
一応リハビリの意味も含めて短い訳デス……。

本来この作品は別のテーマをもとに作られたモノでして、今回の3つのキーワードはそのテーマを考える時に思いついたものです（後【自殺】が入りますけど）。
それに関してはまた活動報告にでも書こうと思います。

では、次回は『坂道』『雨』『すれ違い』です。
評価感想お待ちしております！

第五回　『坂道』『雨』『すれ違い』（前書き）

どうもこんにちわ、兄琉です。
前回から一週間明けての更新デス。
では第五回『坂道』『雨』『すれ違い』どうぞ

第五回　『坂道』『雨』『すれ違い』

三題小噺第五回『食人鬼の紅い雫』

昔から僕たち兄弟は仲が良かった。
周囲の人に認められ、皆に好かれる兄とその後ろを隠れるようについていく弟の僕。
兄の友人と遊んでる時も兄は時々僕がちゃんと付いてきているか確認してくれて……あの時の僕はとても満ち足りていた。

だが、最近どうも兄の様子がおかしい。一年前に両親が海外出張で出て行ってからだ。
始めは食事を取る量が減っていき、具合が悪くなったのかと思う事もあった。
次第に一緒に遊ぶ機会も減り……、最近ではほぼ毎晩、僕は一人で過ごしていた。

「兄さん、最近どうしたの？　顔色も悪いし……」
「……何でも、ないさ……。気にするな」

僕は今夜も一人で過ごす事になりそうだ。

数日後、僕は兄さんの後をつけていた。満月の一歩手前の月が大きく輝き、周囲を照らしてくれる。
町外れへと向かっていく兄さんを追う身としては有難い事だった。
そろそろ道が舗装されていない辺りまで差し掛かった時だ。兄さんは突然立ち止まり、周囲を見渡し始めた。まるでその姿は獣が怯

えているようで、弱弱しい。
僕は念のため、慎重に身を隠し息を潜める。
だが兄さんはこちらへ視線を向けると慌てたように草むらの中へと駆け込んでいった。
その先には廃工場位しかないはず……。

兄さんを見失った僕は今夜もまた一人で夜を過ごす、と思ったのだが深夜に兄が帰ってきた。
僕に上着の洗濯を頼むと居間のソファーに沈み込み死んだように眠りに落ちていた。

渡された上着の端についた赤黒い液体が、僕の心をざわつかせた。

「最近はお兄さんと一緒に来ないけれど……まさか喧嘩でもしたのかい？」
「いえ、そんなことは。兄さんは最近ここに来ますか？」

マスターの茶化すような言葉に僕は軽く笑って返すと、マスターは少し真剣な顔になった。
たまにね、と一言だけ僕の質問に返すとマスターは再びグラスを磨く作業へと戻っていった。
ここは両親の友人がマスターをしている喫茶店で、昔はよく兄さんと来ていた。

「何があったかは知らないけれど……随分と疲れているようだったよ」
「昨晩、廃工場の方へと行くのは見たんですが見失ってしまって」
「廃工場かい？じゃあ、アレかなぁ」「アレ？」
「いや、私もお客様から聞いた話なんだけどね……出るらしい

んだよ、あの廃工場に」
「幽霊、ですか？」
マスターは首を軽く横に振ると、一呼吸をはさむ。
「食人鬼（イーター）、さ」
僕は何かが喉を詰まりながら通り抜けるのを感じ、押し流す様に冷えた麦茶を飲みこんだ。
「何人かがね、見たらしいんだよ。廃工場に飛び散ったおびただしい量の血を」

そこから生まれた怪談が…

丑三つ時の廃工場
真紅に塗れた満月を
背中に受けて食人鬼は嗤（わら）う……

「マスター、今夜は」「あぁ、満月だね」
僕はマスターにお礼を一言、気がついた時には喫茶店を飛び出していた。
満月は僕を嘲笑うかのように、真紅に塗れていた。

丑三つ時とまではいかないがカレンダーの日付が変わった頃、僕は昨晩兄さんを見失ったあの場所へとたどり着いた。
全力疾走と緊張で心音が五月蝿く鳴り響き、口からは蒸気機関車の様に白い息を吐き出し続ける。

ようやく呼吸も落ち着き、一度大きな深呼吸をすると僕は廃工場へと足を向けた。先程までとはまた違った汗が背中を伝い、ばれない様にゆっくりと足を進める。
廃工場に近付くにつれて物音がするようになったが、僕は聞こえないふりをする。
そして、廃工場入り口前の【坂道】で、僕は思わず動きを止めた。

『何か』がいる。

月を背に、何かがうずくまる様にこちらに影を落としていた。
僕は坂道の下で茫然と立ち尽くし影を見る。
影はゆっくりと立ち上がり何かを叫びながら、林の中から飛び出してくる何かを相手に暴れ出していた。

僕はまるでテレビか何かを通して見ているかのような客観的な視点で見ていたが、自分の頬に生温かい何かが飛んできた事で気を取り戻した。
ゆっくりと自分の右頬へと手を伸ばし、震える指先を眼の前へと持ってくる。

「血……？」

僕の手には赤黒い、少し粘度のある液体が付着していた。
その液体は何滴も何滴も僕に向かって飛んできていて……血の【

雨】ってこんな事を言うんだろうなぁと他人事のように感じていた。
そして僕の指の間から見える影、始めてみた時から本当は感じていたのだけれど……そこには認めたくない事実があった。
影は一通りの相手が終わったのか、今度は驚く様子もなくゆっくりとこちらを向いた。

「兄さん……」
「……」

影……兄さんの腕は二倍ほどに膨らんでいて、その腕には緑色のウネウネした何かが巻きついて周囲を警戒するように動き回っていた。
緑色の何かは兄さんの皮膚を持ちあげる様に顔にまで浸食していて、脈打っている。まるで兄さんがソレに浸食されているかのようで僕は吐き気がした。
兄さんはゆっくりとこちらに歩み寄ってくるが、僕は一歩も……それこそ指の一本すらも動かす事が出来なかった。

「こんな姿、見せたくなかったんだけどな……」

僕の耳に口を近づけると、小さな言葉で兄さんは語りかけてくれた。

そのまま兄さんは一度も僕と目を合わせる事なく【すれ違い】ざま「サヨナラ」と一言だけ告げて去っていった。

———僕はこれからずっと、一人で夜を過ごす事になるんだろうか。

第五回　『坂道』『雨』『すれ違い』（後書き）

第五回『坂道』『雨』『すれ違い』でした。

これまた今までとは少し違った感じになった気がします。
詳しいことは後日の活動報告で。

それでは、次回は恐らく『オーディオプレイヤー』『爆発』『森』です。
カオスです、この上なくカオスです。

第六回『遺産』『無差別』『大切』（前書き）

どうも、お久しぶりです、兄琉です。
今回のお題は『遺産』『無差別』『大切』です。
それでは、どうぞ！

第六回『遺産』『無差別』『大切』

三題小噺第六回『無差別に一途な思い』

「……僕と、付き合ってくれませんか？」

春は、出会いと別れの季節。目まぐるしく世界が変わっていき、人々もまた変わっていく。

散りゆく桜の木の下で、僕は心臓の高鳴りを必死に抑えながら想いを口にしていた。

移ろいゆく心の中でただ一つ変わらないこの想いは、伝わるのだろうか。

「鳴神（なるかみ）……君……」

目の前の彼女は頬を桜色に染め、一瞬だけ、視線が交わる。

小刻みに震える彼女の体。彼女もまた、同じように緊張しているのだろうか。

僕は彼女から視線を外さない。何があっても、逃げ出さないと誓ったのだから。

そう、彼女が何故か両拳を顔の前に構えて、ステップを刻みだしたとしてもだ。

桜色の頬が薔薇の様に赤く燃え上がり、地面を蹴り推進力を増し

た拳が飛んできたとしても、僕は微動だにしなかった。
「今日だけで何人に告白してんのよアンタはぁあああああ！！」
彼女の右ストレートが綺麗に顔面にめり込み、鼻からは彼女の顔よりも赤い噴水があがる。
名誉の為に言っておくと、避けようと思えば避ける事は出来た。しかし、甘んじて拳を受けたのだ。なぜなら、
「フフ……それが君の愛の形かい？」
「気持ち悪いわっ！」
あぁ今日もまた愛を伝える事が出来た、と満足げな表情で僕は意識を手放していった。

「鳴神、君また振られたのかい……」
「残念ながら……難しいもんだね、告白ってやつは」
次の日、一人の男が僕の顔に張られたガーゼを見て、呆れた声をかけてきた。
男の名前は長谷部夕樹、僕に話しかけてくる数少ない男だ。
「これでお前の【無差別】告白も今月に入って１５回目か？　頑張るねぇ」
因みに、まだ新学期が始まってから４日目だ。
確かに少し多いかもしれないが、それよりも気になるところがある。

「待て、無差別とはどういう事だい？　僕だって誰でもと言う訳じゃない」
「いやいや、回数と女のタイプがバラバラ過ぎてもう無差別告白事件って言われてるぞ？」

彼は軽くため息をついて、頬に手をついた。相変わらず演技の上手い男だ。

「だけどその話を流しているのも君だろう？　お陰で僕は振られる毎日だ」
「……ばれてたか。まぁでも、俺のお陰で告白の舞台は作りやすいだろう？」
「まぁ、ね」

結局はギブアンドテイク。僕の告白話を聞かせる代わりに彼は女の子の情報を渡す、と言った関係が築かれていた。

「しっかし、見合いの話もいっぱい来てるって言うのに何でまた普通の子に手を出すかねぇ」
「見合いは愛がないじゃないか、僕は愛を伝え合いたいんだ！」

拳を握りしめて勢いよく立ちあがる。周囲の視線がツララの様に突き刺さるが、気にしない。
確かに、祖父の残した【遺産】目当てに僕の元には多くの見合い話が転がり込んでくる。
だがそこには愛がないのだ。愛を伝え合う事が出来ない以上、見合いを受ける訳にはいかないのだ。

「ま、まぁ女なんて星の数程いるさ、頑張りな」

「……星ってのは手が届かないモノなのだけれど……」
「「……」」

気まずい沈黙が場を支配する。
窓から流れ込む暖かな風が気持ち程度、和ませてくれた。

「……そんなお前に朗報だ、今日転入生が来るらしいぞ」
「随分と、無理やりだな……」
「女生徒で随分と可愛いとの話だ、期待していいんじゃないか？」

無視して話を続けられる。どうやら転入生は随分と良家のお嬢様らしい。
だが愛を伝えるかは見てから決める。それが僕が決めたルールだった。

「席につけぇー、ＨＲを始めるぞー」

そうこうしている内に担任が教室へと入ってきて、教室の空気を察知する。
全体的にそわそわと落ちつかない雰囲気。時折入口に視線を向ける生徒が多いのがその空気の原因を明らかにしていた。

「あー、何故かお前らも知っての通り今日から転入生が来る。おーい、入ってこい」

担任は長谷部を一瞥して、入口に声をかけた。
ゆっくりと音を立てずに横滑りをする扉。全員の視線が一か所へと集中し、そして全員が息を飲んだ。

「初めまして、日向香織です……よろしくお願いします」

扉を通って出てきたのは、綺麗と言うより可愛い、という言葉が似合いそうな少女だった。
１５５センチ程度の身長に肩まで届きそうな少し癖のある茶色がかった髪の毛。大きな瞳が教室を見渡し、一瞬だけ視線を下に向けた。
緊張を微塵も感じさせないその佇まいからは良家の雰囲気を感じさせ、教室は静まり返っていた。
一方僕の心は、教室の空気とは逆に熱くなっていたのだけれど。
そんな僕を長谷部が、ひどく冷めた目でいたのは気にしないでおこう。

「鳴神さん、何かご用ですか？」
その日の放課後、僕は彼女を呼び出していた。
場所は昨日と同じ桜の木の下。彼女は何も分かっていない様な顔で小首をかしげていた。
「実は、貴女にお話ししたい事があって……」
一時の沈黙。二人の間を舞い落ちる桜の花びらが明確に時を刻んでいた。
高鳴る鼓動を抑え、僕は何度言っても慣れないあの言葉を口にした。
「……僕と、付き合ってくれませんか？」

彼女はひどく驚いた表情を見せ、口に小さな手を当てる。
久方ぶりに見たその反応を見て、僕は彼女に愛を伝えてよかったと心から感じた。
だが、すこしだけ時間が経って彼女の様子が少しだけ変わる。
「鳴神さん……会って間もない貴方に失礼かもしれませんが……」
彼女はしっかりとこちらを見据え、目を外す事無く語りかけてくる。
そして僕は、結局はいつも通りかと手を握りしめ、歯を食いしばった。
「鳴神さんは、告白する時しっかりと相手を見てあげていますか？」
突然だった。てっきり普通に断られるだけかと思えば、そのどちらでもない返答。
一瞬理解が追いつかず、意味の無い言葉が口をついて出てくる。
「今の鳴神さんからは愛を伝えたい、誰にでもいいから自分の愛を受け入れて欲しい、そのように感じるんです」
たたみかける様に、こちらの返事を待つことなく彼女は言葉を重ねる。
「もっと、一人を……【大切】にしてあげてください」
まるで、自分の事の様に彼女は言葉を震わせた。
その表情からは先程までとは違う、弱弱しさすら感じさせて……
僕は一歩も動くことができなかった。

「よぉ、どうだ１６回目の失敗は」

彼女の去った樹の下に座り込んでいると、一人の男がどこからともなく現れた。

ずっと見ていたのだろう、その表情には笑みがない。

「あぁ、ようやく分かったよ……」

「おぉ……やっとか……」

僕はゆっくりと立ち上がると、拳を天に突き上げた。

「つまり、僕は彼女……いや、日向さん一筋に生きればいいんだな！」

「……は？」

「一人を大切にしてください、って事はつまり……私だけを見てくださいって事だ！　よし、日向さん、僕は今日から日向さん一筋に生きていきます！」

男の咆哮は桜の樹を揺らし、花びらが舞いあがった。

僕の本当の春は……これから始まる。

「いや、違うと思うんだけどなぁ……」

男の呟きは、届くことがなかった。

第六回『遺産』『無差別』『大切』（後書き）

三題小噺第六回、いかがだったでしょうか？
心の底ではこれでは駄目だと思いつつも愛に恵まれない少年は愛を叫び続ける……。
そんな彼の心が伝われば幸いです。

まぁ、その恋が実る事は無いと思いますがね……。

では評価感想お待ちしてます！

第七回『ビジネス』『国語』『葬る』（前書き）

三題小噺第七回は『ビジネス』『国語』『葬る』です。
闇に紛れて暗躍する男たちの行く末は如何にっ……！
ではどうぞー。

第七回『ビジネス』『国語』『葬る』

三題小噺第七回『真実は闇へと向かう』

しん、と静まり返る部屋の中に木霊する何かを叩くような音。
人がいるはずであるのに、彼らの声は一切発する事はない。
皆恐れているのだ、隙間を縫うように滑りぬけるモノに……。

だが、だからこそ、人との交流が困難だからこそ成り立つ【ビジネス】と言うものがある。

言葉を伝える方法は何も口で喋るだけではない。
紙に書く、サインを送る、モールス信号で交信する。互いに視線を交わさずとも、顔を突き合わせずとも言葉を通わせる事は出来るのだ。

そうした手段を用いて、決して伝える事の出来ないはずの情報を伝える事は非常に価値が高いものとなる。

「その情報は簡単には譲れないな……」

当然の如く実際に話している訳ではないが便宜上話している様にさせていただこう。
こちらの言葉に相手は苛立つ様に音を高める。監視者に一睨みされた様だが心配はない。こちらの動きが漏れることはあり得ないの

だから。

「ならば、コイツの情報と交換でいこう」

「出し惜しみはよせ……お前が隠し持っている情報の断片はこちらも掴んでいるんだ」

熱くなっては負けだ、表向きはどうであれ中は微動だにせずにクール。これが一番いい。

案の定相手は迫るタイムリミットに痺れを切らし、苦渋の決断を迫られる。

交渉時間には限りがある。こちらとしてもあちらとしても次の案件が待ち構えている以上時間は割けない。もって後2分と言ったところだろう。

「もし、こちらがリークした事が漏れたら俺がどうなるか分かっているのか……」

「その可能性は、0%、だ。証拠は確実に、一片も残らず、闇へと【葬る】事を誓おう」

この一言が重要。人間は自分の言って欲しい事を相手に自信を持って言われるとそれに縋ってしまう傾向がある。

所詮、人間は自分を守るために信じたい事だけを信じるものなのだから……。

「……っ。仕方、ないか……受けよう」

「成立、だな」

相手に顔が見えないのをいい事に、ほくそ笑む。この上なく計画通り。後は最終段階へと移行するのみだ。

この段階になると媒体は紙がいい。確実な証拠、そしてより高度

な伝達が可能となる。
必要最小限の情報だけを記入して綺麗に、この上なく丁寧に折りたたんでいく。
相手も同じことをしている気配を感じ、お互いに準備ができた事を確認する。

「いくぞ……」
「あぁ、３・２・１……ＧＯ……」

タイミングを見計らい、互いに交差するように紙が放物線を描く。
大丈夫、まだ、見られてはいない。次こそが一世一代の大勝負。

速やかに紙を仕舞うと、偶然を装い持っていた棒を床へと落とす。
静まり返った部屋に響く落下音。そして驚き音を立ててしまう交渉相手。
監視者の眼が勢いよく１８０度回ってこちらに向き、落ちたものと怯えている交渉相手へと向かった。

未だ渡した紙は相手の手元にある。隠す暇もなく襲い来る、監視者。

もう、逃げる事は……出来ない。

「この紙は……なんだ」

地を震わせる様な低い声に脅える一人の男。
有無を言わさず取り上げられた紙が開かれていった。

「……【葬る】、か」

そう、紙には【葬る】とただ一言だけ書かれてあった。
だがそれこそが男の知りたかった情報なのだ。
「俺の【国語】のテストでカンニングをするとは……いい度胸だな、ちょっと来い！」
「ひぃいいいいいい！」
男は教室から引きずられる様に出て行き、ほぼ同時に終了のチャイムが鳴り響いた。

「長谷部、どうしたんだそんなに笑って」
「あぁ、鳴神か……いや、カンニングはダメだなと思ってね」
「……やはりお前がやったのか」
「でもお陰で、また面白い情報が聞けたよ。ところで鳴神、君また振られたのかい……」
「残念ながら……難しいもんだね、告白ってやつは」
こうして、何事もなかったかのように、時間は動き始めたのだった。

第七回『ビジネス』『国語』『葬る』（後書き）

『真実は闇へと向かう』、いかがだったでしょうか。
完全に雰囲気で押し切った短編でしたが楽しく書けたので良かったです（、・ω・´）
皆さんはどこで結末が分かったのでしょうか？
では評価感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7218j/

三題小噺集～なんでもアリな物語達～

2011年10月4日18時38分発行